

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5498

シベリア北東部におけるチュクチの トナカイ牧畜と放牧テリトリー

池 谷 和 信*

Reindeer Grazing by the Chukchee and Grazing Territory in Northeastern Siberia

Kazunobu IKEYA

In recent years, there have been many studies conducted by cultural anthropologists on changes in reindeer grazing following the collapse of the Soviet Union. However, there have been no studies about the Chukchee, who live in northeastern Siberia. This paper aims to clarify whether changes in reindeer grazing by the Chukchee following the collapse of the Soviet Union were unavoidable or not and to clarify how the Chukchee adapted to changes in the politico-economic system.

First, an outline of the central villages that are at the bottom of the hierarchy of the state administrative organization and the life in reindeer camps run by “brigades” (production groups) is given. Next, the system of farm management under state control and adaptation by the nomadic Chukchee to this system are discussed.

A survey was conducted by the author in the Rytkuchi Village in Chaun District of Chukot, an autonomous Russian republic, over a 34-day period, from October 20 to November 22, 1997. During this period, the author spent one week observing the lifestyle of the Chukchee at a reindeer camp. In the village, the author collected statistical information from the Sovkhoz office and the village office, and conducted interviews with Chukchee.

* 国立民族学博物館民族社会研究部助教授

キーワード チュクチ, トナカイ牧畜, トナカイキャンプ, 移動パターン, 放牧テリトリー

Key Words Chukchee, Reindeer Grazing, Reindeer Camp, Migration Pattern, Grazing Territory

The results of the survey are as follows.

- (1) There are housing complexes in the village that are very similar to public servants' in Japan. Both Chukchee and Russians live in the village, with 65% of the village population being Chukchee. The Russians hold most of the jobs in the Sovkhoz and the village offices, while most of the Chukchee are involved in reindeer grazing.
- (2) The composition of residents of the reindeer camps is centered around family members and relatives. The number of camp inhabitants fluctuates due to migration from other camps. The migration patterns of camp inhabitants differs in summer and winter. In summer, each camp divides into a camp for grazing the reindeer and a camp for processing reindeer hides. In winter, all of the camp inhabitants move once every one to two weeks using snowmobiles or reindeer sleds. The migration routes are usually along the river in the upstream direction in summer and to the coastal region in winter. There is always one herder watching over the reindeer at all times. Two herders take turns to tend the reindeer each day. Dogs are used to help with the herding in summer but not in winter. A whistle is sometimes used when herding the reindeer.
- (3) Sovkhoz office maintains records on the composition of reindeer herds and the number of reindeer. The number of reindeer to be slaughtered each year is decided by the Sovkhoz office, and the herders receive a cash payment. The costs of reindeer slaughtered in rituals and for home consumption are deducted from this cash payment.
- (4) Grazing areas have had to be changed because of the eradication of reindeer moss due to fire and because reindeer from the herds were led away by wild reindeer. Expansion of the grazing land onto neighboring farms led to marriage between neighboring settlements of Chukchee.

Thus, despite the collapse of the Soviet Union, reindeer grazing by the Chukchee has continued under a new system of state management. The Chukchee have not only continued grazing reindeer but have also adapted to the new environment.

1. はじめに

旧ソ連の社会主義体制の崩壊後におけるトナカイ牧畜の変容に関しては、近年、イギリスやアメリカ、そして日本の文化人類学者による研究が盛んに行われてきている。例えば、シベリアの西部から東部にかけて、ヤマル半島やギダン半島のネネツ [MONTAIGNE 1998; 吉田 1998]、サハのエヴェンやヤクート [VITEBSKY 1989a, b; 高倉 1998, 1999]、

カムチャツカ半島のコリヤーク [大島 1998]、サハリン北部のウイルタ [Kwon 1993; 井上 1996] など、主として4つの地域社会の事例が選ばれてきた。そしてこれらの研究では、トナカイ肉を中心とする食文化、トナカイ飼育の概況や儀礼、牧夫の親族関係や家畜所有のあり方などと焦点は異なるけれども、トナカイ牧畜をささえてきた国営農場の崩壊のあとの会社組織の形成、個人所有のトナカイ頭数の増加などが指摘されてきた。また、ヴィデブスキーは、牧畜を家族総出で移動する遊牧 (Nomadism) と牧夫のみが移動する生産遊牧 (Production Nomadism) にわけ、国営農場下のエヴェンの牧畜を後者のタイプに位置づけている [VITEBSKY 1989; 池谷 1993]。

しかし、上述のような枠組みにおいて、チュクチのトナカイ牧畜の変容をみつかった報告はみられない¹⁾。そこで、本稿では、従来の知見に欠けているチュクチの情報を補充すると同時に、ソ連崩壊後におけるロシアのトナカイ牧畜の多様な変容過程を把握するための枠組みを作ることを目的とする。具体的には、ソ連崩壊後に、チュクチのトナカイ牧畜がいかなる変容を余儀なくされたのか否か、あるいは彼らが政治経済体制の変化に対してどのような対応をしてきたのかを明らかにすることにある。

この報告では、ロシア共和国チュコト自治管区チャウン (Chaun) 地区レトクーチ (Rytkuchi) 村²⁾を対象にして、村の中心的経済活動であるトナカイ牧畜を通して、ツンドラの自然とトナカイ牧畜との関わり合いを把握することを目的とする。これを通して、国家がいかにたくみにトナカイ牧畜民の伝統文化を利用・管理しているのか、そしてこれに対するどのような牧畜民の主体的行動がみられるのかを明らかにする。

本稿では、まず、国家の管理システムの末端にある中心村落 (以下、村と呼ぶ) (第2章) と、そこに管理されているブリガーダ (Brigade 生産隊) が展開する場としてのトナカイキャンプ (第3章) の生活を概観する。次に、国家の管理のもとでの農場経営 (第4章) とそれへの牧畜民の主体的対応 (第5章) を明らかにする。

現地調査は、1997年10月20日から11月22日までの34日間にわたって実施された。なかでも、約1週間は、ブリガーダNO.2のトナカイ放牧に従事するキャンプで、チュクチの人々と寝食をともにして、彼らの生活をつぶさに参与観察するよう努めた。また、村では、元村長の家に住み込みをして、ソフホーズ事務所や村役場での統計資料の収集、村に滞在するチュクチへの聞き取り調査をおこなった。

さて、チュクチ (Chukchee) は、ロシア共和国北東部のチュコト半島に暮らす先住民として知られている。1989年の人口は、約15,000人を示す [VAKHTIN 1994: 34]。彼らは、19世紀後期の主な生業様式を指標として、トナカイ牧畜を生業の中心とするトナカイチュクチとセイウチやアザラシ漁を生業の中心とする海岸チュクチに二分されていた [BOGORAS 1901]。しかし現在では、1950年代に始まったソビエトの社会主義化のなかで、国営農場 (以下、Sovkhoz ソフホーズと呼ぶ) で働く国家公務員になっている人が多い。

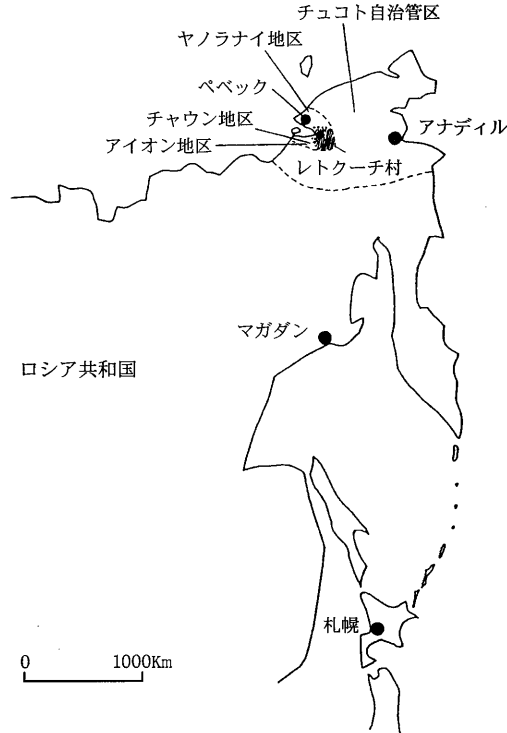


図1 調査地の位置

チャウン地区は、1990年にマガダン州から分離して成立したチュコト自治管区（約72km²の面積）の西北部に位置する（図1）。1997年の人口はおよそ10,800人で、このうち地区を管轄する役所がおかれているペベック市の人口は8,000人を示す〔文化庁のオースキン氏、私信〕。この地区内には、チャウン、ヤノラナイ、アイオンの3つのソフホーズが存在していたが、1995年にヤノラナイのソフホーズがロシア人とチュクチの24人から構成される会社組織に変化した³⁾。ソフホーズの統計資料によると、1997年における3つのソフホーズのトナカイ頭数は、それぞれ13,000頭、2,792頭、9,664頭を示し、チャウンのそれが最も大きいのがわかる。

2. 中心村落での生活

1) 村の概観

図1は、レトクーチ村の位置を示す。この村は、北緯69度、東経171度に位置し、地区の中心都市ペベックの南に約100km離れ、北極海につながるチャウン湾に面している。レトクーチとは、チュクチ語で銃の音を意味し、ロシア人からはウスチャオンと呼ばれてい

る。この村は、南北に約240km、東西に約200kmの広がりを持つソフホーズの一部を占め、この広大なツンドラでトナカイの放牧がおこなわれている。

地形は、川沿いを中心として表面が凹凸の低地がつづき、南部には分水嶺となる山地が広がる。川沿いには湖が多い。気候では、1996年の月別の平均気温をみると、最暖月の8月で14℃、最寒月の2月で-27.5℃となっている（図2）。月別の降水量は、8月が47mmで最大で、1月が5mmで最小を示す。また7月上旬から8月中旬までは白夜がつづくのに対して、12月22日から1月25日は一日中ほぼ真っ暗になる。植生は、灌木や地衣類からなるツンドラでおおわれている。なかでも、ハナゴケはトナカイの食物として不可欠のものである。また、コリマ川の支流域を放牧地とするブリガーダNO.5には、高さが2～3mの木が山すそにまばらにある。これらは、その素材として使われる。

ペベックから村へは、12月から5月上旬までの約5カ月間、海上が凍結して道路となるのでバスやトラックを使って行くことが可能である。1994年には、週2回のバスがあり、所要は約3時間であるという〔呉人、私信〕。また、7月末から9月にかけては、冬の発電や暖房に使う石炭などを運搬する貨物船が、約14回にわたってペベックから村へ行っている。所要は、約6時間かかる。なお、1997年8月以来、かつては定期便であった週1便のヘリコプターは運行されていない。

村長からの聞きとりによると、1997年10月現在の村の人口は493人を示す（図3）。このなかで約110人が、7つのブリガーダに分かれてトナカイキャンプに居住している。これらは、1人のウクライナ人や2人のエヴェンやコリヤークを除いてすべてがチュクチである。また、現在の人口のうちチュクチは323人で全人口の約65%を占め、その他はロシア

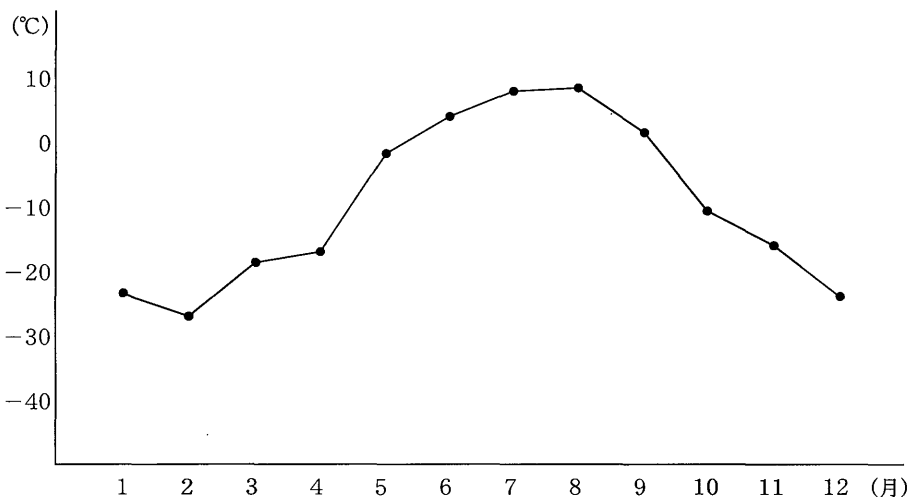


図2 レトクーチ村の気温の変化（1996年）
気象庁のペベック支局の統計資料より筆者作成

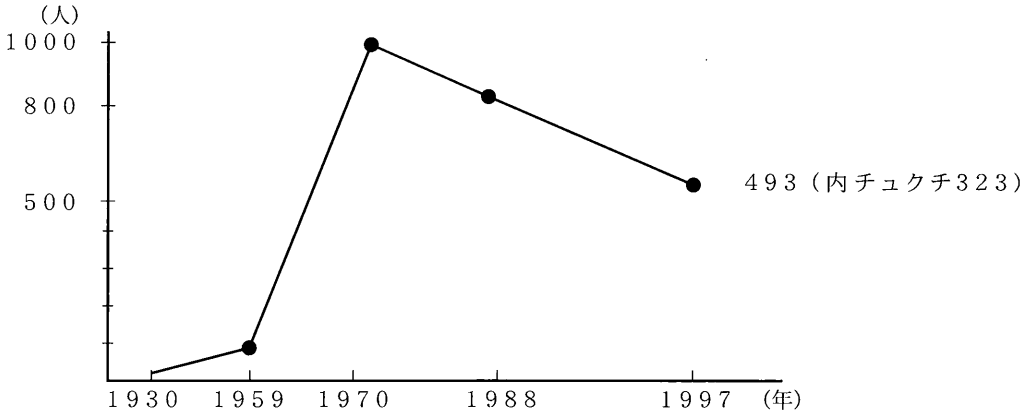


図3 レトクーチ村の人口推移

1959年の人口は、ゲウトアさんの推定による。

1988年の人口は、NHK取材班他 [1989: 12] による。

人、ウクライナ人などである。さらに、現在の村長がこの村にやってきた1970年頃の人口が1,000人でピークに達していたこと、1988年の人口が890人を示したことから、1988年から1997年までの10年間に約400人の人口が減少したことがわかる。

村には、国家が所有する2階建てか平屋の集合住宅のほかに（写真1）、学校、幼稚園、病院、村役場、ソフホーズ事務所、火力発電所、ソフホーズが経営する雑貨屋、サウナ付き公衆浴場、図書室などがある（図4）⁴⁾。集合住宅には194戸がはいっている。ここ数年、ロシア人を中心とする白人の村外への流出にともない空室が増えたことによって⁵⁾、チュクチがそのあとに入居する事例が多くみられる。このため、一年のほとんどをトナカイキャンプで生活するチュクチであっても、村内に部屋を借りている。また各部屋には、暖房のためのパイプ管が通り、電気コンロのついた台所やカラーテレビ、冷蔵庫などがおかれている。これらの近代的な施設は、冬期には氷を溶かして水を入手したり、しばしば停電になることを除いて、筆者が生活している日本の公務員住宅とほとんど変わらない。

村での就業状況をみてみよう。村長、ソフホーズ長、校長、医師や看護婦などは、すべてロシア人が担っている。チュクチは、村役場の会計事務に3名、チュクチ語を教える先生が1名のほか、郵便局、文化局などに2～3名いる程度である⁶⁾⁷⁾。最近、絵画や音楽、そしてチュクチの伝統工芸を教える文化芸術学校がつくられ、そこに勤める人もいる。これらに対して、ツンドラでトナカイ牧畜に従事する人々は、1人のウクライナ人を除いてすべてがチュクチである。

一般に、ロシア国内では、6歳から16歳までの11年間にわたり学校へ行くことが義務づけられている。この村の学校の生徒数は合計で118人を示し、このうち70人は学校に隣接する寄宿舎で生活する⁸⁾。また、幼稚園児は48人いる。地区では、村の寄宿舎の子供をト



写真1 中心村落のレトクーチ村。2階建ての集合住宅が規則正しく立ち並ぶ。

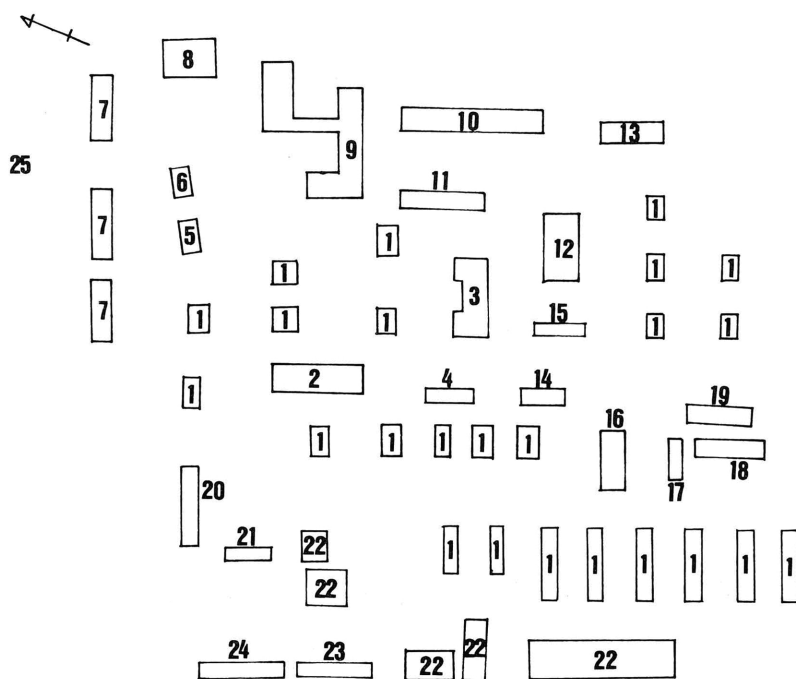


図4 レトクーチ村の建物の配置

- 1 集合住宅 (194世帯分)、2 文化局、3 博物館、4 図書室、5 消防施設、6 雑貨屋、7 店の倉庫、8 気象観測所、9 学校、10 学生寮、11 病院、12 幼稚園・保育所、13 服製造工場 (1992年閉鎖)、14 倉庫、15 元は独身者の住居、16 公衆浴場、17 袋角の加工場、18 年金者のホーム、19 スノーモービル用の倉庫、20 ソフホーズ事務所、21 村役場、22 ソフホーズ用の倉庫、23 暖房施設、24 火力発電所、25 ヘリポート

ナカイキャンプに送り迎えするサービスをしていた。学校が6月1日から8月31日まで夏休み期間なので、6月初めに多くの子供は地区のヘリコプターで家族の住むトナカイキャンプへ行く。平年では、8月末にヘリコプターを使い、2回にわけて7カ所のブリガーダから子供を村へ運ぶといわれる。しかし、1997年11月7日現在、地区の財政難によってヘリコプターによる輸送が確保できないために、11名の子供がキャンプから学校に戻れない状態であった。

村の雑貨屋では、パン（1斤18,300ルーブル [約360円]）、砂糖（1kg33,000ルーブル [約600円]）、タバコ（1箱5,000ルーブル [約100円]）、小麦粉などが販売されている。なお、1992年には、村内に宿泊所があり、週に2回映画が上映されていたという。

2）村の歴史（1930年頃－1997年）

チャウン地区の中心地ペベックには、1929年からロシア人が住むようになったといわれる [NHK取材班他 1989: 10]。その後1932年には、文化基地（クストバーザ）としてペベックに集合住宅が建設される⁹⁾。

これらペベックでの最初のロシア人とレトクーチ村のロシア人との関係は明らかではないが、村の博物館の資料によると、1930年ごろには村はなく、ロシア人猟師のマルコフ氏兄弟が住んでいたという。彼らは1920年代の終わりに来たというが、どこから来たのかは不明である。1931－32年に、ロシア科学アカデミーの鳥類研究所のあった所に村ができる。1933－34年には、村が現在の場所に移り、学校や学生寮やパン工場ができる。

1939年には、人口のセンサスがおこなわれる。1940年に、最初のコルホーズがつくられ、マルコフ氏がその責任者となる。1941年に、モスクワから学校の先生が来たり、文化局や診療所ができる。1957年に、ソフホーズがつくられ、ゲウトアの夫がその責任者となる。1959年には、人口約80人のうち大部分をロシア人が占め、チュクチは少ない。1965年には12のブリガーダがあり、各々に万能走行車（ヴェズジェフォート）とトラクターがあった。この年にソフホーズで所有していた船が廃船となる。1969年にツンドラでの火事がある。1980年に、ゲウトアは、文化局の仕事としてツンドラのチュクチに映画を見せながら、村内で工芸品を作り始める。そのことが実って、1986年に村に博物館がつくられる。

3. トナカイキャンプでの生活 ―ブリガーダNO.2の事例―

村の背後には広大なツンドラが広がり、トナカイ牧畜が展開する。このソフホーズには7つのブリガーダがあるが、筆者の滞在したブリガーダNO.2（以下NO.2とする）のトナカイキャンプの生活に焦点をあてて記述する（写真2）。



写真2 ブリガーダNO.2のトナカイキャンプ。冬用のロシア式テントは、トナカイ皮製である。料理は小屋の入口の外で作られる。

1) 衣食住

ツンドラのキャンプでの衣・食・住には、トナカイを中心とするチュクチの文化がよく反映している。まず、冬用の衣服はトナカイの皮から作られる。A（アントヌフン）のものは3枚の皮からなり、糸はロシア製のものが使われる。

食では、トナカイの肉を煮たりゆでたりする料理が中心であるが、村で作られた四角形のパンがあれば食べられる。1997年10月27日に、食用のために2頭のトナカイを殺した。また、その日には、イワン氏が村のソフホーズの店から前借りした10数個のパンがおかれていた。10月29日、Aが63匹のコマイ“ハーリウス”を釣りあげたが、魚は副食として欠かせない。

女性が料理を作る。小屋の外側に長さ1.5m余りの3本の棒でやぐらをたて、そこから鍋がつるされる（写真2）。肉は、石おのをつかって細かくされる。

犬は、Aのテントには5匹、隣のBのテントには5匹いる。犬は狼犬ではなく、夏に牧夫の手伝いをする。冬の日中は、小屋の外で足首をひもにしばりつけられ、午後5時ころ、4匹の犬が入口のテントのなかに入れられ、もう1匹は内のテント内でロープにつながれている（写真3）。犬は、雌犬では子供を産むので、すべて雄犬である。

冬の間住居となるテントが、川岸の内側で凍り付いた川底のうえに建てられる。冬は、ロシア式テント（写真2）、夏は円錐型ハット“ヤランガ”が使われる。1972年に円錐型ハットからロシア式テントに変わったことにともない、だるまストーブが導入される。しかし、ブリガーダNO.9（以下、NO.9とする）では、現在でも、ロシア式テントと円錐



写真3 テントのなかには2つに仕切られているが、入口からみて奥の部屋。そこで、チュクチは食事をとり寝る。青年の服、ズボン、クツはすべてトナカイの皮製である。犬は、夏のあいだ、青年の放牧用に使われる。

型ハットとの組み合わせになっている。夜は、ケロシンランプが使われている（写真3）。

2) 集団構成

NO.2の人口は17名で、1名のエヴェン（A）を除いてすべてチュクチである。図5は、NO.2のキャンプ構成員の家系図を示している。NO.2には、3つのテントがあり、A（アントヌフ）、B（トレセイウエ）、C（イワン）の3世帯、それぞれ5人、6人、6人で、合計17人が生活している。このうちCの2人の子供は村の学校へ通っているので、6月から8月の夏休みの期間を除いてはキャンプには滞在していない。A、B、Cの3世帯は、Aの妻の弟がCで、Aの子供がBの妻というように、お互いが血縁関係によって結ばれている。また、血縁のない若者の男性が3人いる。トーノーはNO.4のトナカイを失ってしまったので、そこから義父である故セレーゲエーノフとともに移籍した。ワレーリアは死亡した母がかつてこのNO.2にいたこと、ワーシャは元ここにいた故セルゲビチの子供であることによっている。

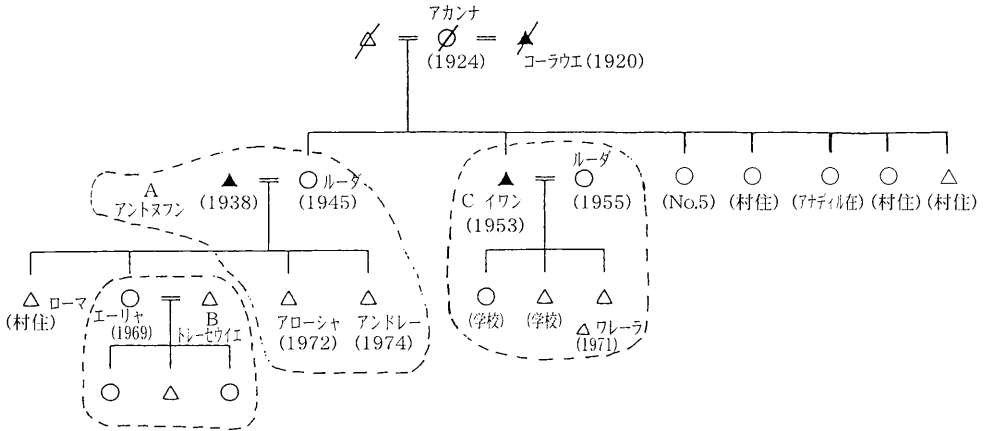


図5 ブリガーダNO.2の構成員の家系図

▲ブリガーダ長の経験者 [] は3軒のテントに対応する。
()内は、ソフホーズ事務所の資料による出生年を示す。

キャンプの成員の年齢をみると、6歳、3歳、7ヶ月という10歳以下の子供が3人いて、10代はまったくいないが、20代、30代の男性がいる。彼らは、村の学校を卒業後、2年間の兵役の義務で、マガダンやサハリン、アムール地域での勤務を終えた後に、キャンプに戻ってきている。近年、このキャンプでは、2人の老人が死亡している[呉人 私信]。1996年4月にコーラウエ（トナカイを飼う人の意味）、8月にセレーゲエーノフである。また、Bは、1991年にNO.10で働いていたので、妻のユーリヤもNO.10にいた。彼らは、1992年に、妻の両親のいるNO.2に移籍する。

NO.2には、ソフホーズによって任命された1人のブリガーダ長がいる。現在はCで、その前はA、さらにその前はAの妻の母親の夫コーラウエであった。Aには4人の子供がいる（図5）。このうち長男のローマのみが村住まいである。彼は、1994年以来、結婚を機会に村に住むようになった。彼は、キャンプの親族の手助けをすることがよくある。例えば、1997年11月1日、彼は村からスノーモービルを使ってキャンプを訪れ、彼の妹とその3人の子供を村に連れて行った。7カ月の乳飲み子の体調が良くなく、村の病院へ行くためである。このようにキャンプと村との間に、親族関係を通じての相互の行き来がみられた。

3) 移動形態

チュクチは、一年を7つの季節に分けている[呉人、私信]。3月下旬から4月までの子トナカイの出産期“ウルオン”、5月から6月中の雪が解け蚊がいない時期“ケットケット”、6月中から8月末の蚊の出る時期“エーテン”、9月の時期、10月から11月の雪が降る時期“ウットハン”、12月の太陽が沈む時期、1～2月の太陽が昇る時期である。

これらの季節の区分に応じて、キャンプの移動形態が変わり、4月下旬、8月下旬、1月下旬の3回にわたり、彼らの儀礼がおこなわれる。

6月初めに、年寄りと若者が分かれる。年寄りは円錐型ハットに住み、冬服を製作したり魚とりに精を出す。若者はロシア式テントに住む。各群には、彼らの荷物を運ぶために、ロシア人やチュクチが運転する1台の万能走行車がつく。かつて、人が荷物を背負って運搬したという。4月下旬に、出産の儀礼が行われる。8月下旬に、放牧キャンプにいた青年が夏の本拠地にもどってきて、4月に生まれた子トナカイを草の上で殺す儀礼が行われる。一家族当たり3～5頭を殺す。この際に殺したトナカイの代金は、給与から差し

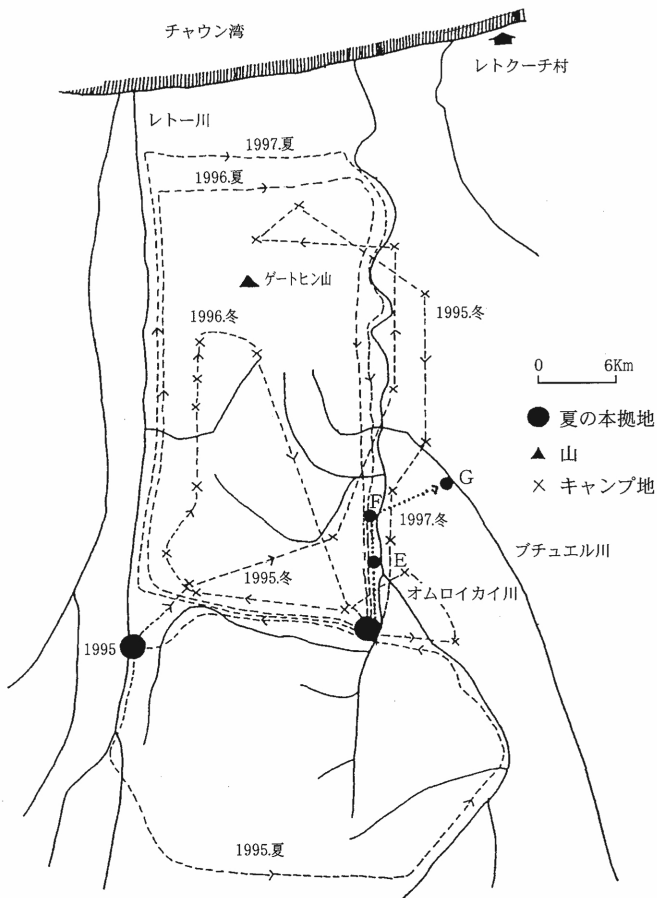


図6 ブリガーダNO.2におけるトナカイ牧畜の移動ルート
(1995年夏から1997年冬まで)

E、F、Gは直接観察による。それ以外は、20万分の1の地図を使用したトーノー氏への聞き取り調査から復元したもの。これは、図9の2に対応する。

引かれている点に注意しよう。10月に、年寄りと若者は合流する。

図6は、1995年8月から1997年10月までにおけるNO.2のキャンプ地の移動を示す。年間の移動形態は、ツンドラが積雪におおわれて運搬用のそのりのできる冬季と、それ以外の時期とで大きく異なっている。まず、冬季は、キャンプの成員全体が集まり、いっしょに移動を繰り返す。これに対して、夏季では、トナカイ群の管理に従事する男性若者のキャンプ地と、トナカイの毛皮加工をする年長者や女性の定住キャンプ地とに二分される。

図6より、1995年の夏の本拠地はレトー川の中流沿いに立地していたが、1996年と1997年のそれはオムロイカイ川中流沿いに変わっていることが明らかである。そして、1995年、1996年の冬季は、オムロイカイ川沿いを下って海の近くまで接近してから¹⁰⁾、夏の本拠地に戻るような経路となっている。トナカイの出産地の確認されている1996年4月には、チャウン湾からの北風を防いでくれるゲートヒン山の南側でおこなわれた(図6参照)。また、1回あたりは、6~20km以上と異なるが、10回以上のキャンプの移動を繰り返すことになる。これに対して、男性若者のみの夏期の移動は、1995年には川の上流側に対して、1996年、1997年には川の下流側で大きく異なっている。つまり、約2年間の移動形態より約2,500頭のトナカイを維持できるブリガーダの放牧地は、レトー川からオムロイカイ川の間に至る範囲であることが明らかになった。

1997年10月の移動状況を詳しく見ると、10月上旬に川や湖が凍るとそのりでの移動が可能になるので、放牧集団が夏の本拠地の集団と合流する。まず、本拠地からE地点へ移動した。この際には、ブリガーダ長Cが有給休暇にはいっていたので、年長者のAが移動地を選択している。10月29日のE地点では、凍り付いたオムロイカイ川の内に隣接する2つの小屋、そこから約7km離れた夏キャンプ地に立地する1つの小屋の2ヵ所に分かれていた。次に、10月30日にE地点から約7km離れたF地点へ移動した。さらに、11月3日にF地点からブチュエル川沿いのG地点へ移動している。いずれも、キャンプ地は、川沿いに決められている。これは、川岸のたき木や氷を砕いて水を利用するのに便利であるためと考えられる。また、E地点からF地点への移動の前日(10月29日)、トナカイの採食地がキャンプより遠くなったから牧夫(アローシャ)の帰りが午後9時40分と遅かった。このことから、キャンプから放牧地までの距離がキャンプの移動を決定していると考えられる。

移動の時期や放牧地の選定は、ブリガーダ長Cによって決められる。彼の不在時にはAである。冬期の移動の間、夏用の円錐型ハットを構成するテントやポールは夏の本拠地におかれる。

キャンプ地の移動には、キャンプの若者であるアローシャとアンドレーのスノーモービルが使われる。10月30日の移動には、有給休暇に入っているCも手伝いに来た。約一時間半で家屋の解体は終わり、人を乗せて次のキャンプ地まではスノーモービルで約26分であった。なお、1995年まではガソリンがなかったので、トナカイでそのりをひいていたというが、ここには駄獣トナカイもいて、いつでもトナカイぞりを使用できる。現在でも、

NO.3、NO.8、NO.9は、トナカイぞりを使っている。新しい移住地では、まず地面の雪を払って土をだす。次に、ポールを建て、ロシア式テントをたてていく。

以上のように、キャンプの移動形態は冬期とそれ以外では異なっているが、毎年移動するルートや範囲がほぼ決まっていることが明らかになった。また、トナカイ牧畜のツンドラへの影響として、トナカイの放牧による植生へのインパクトが大きいのであるが、人の側もトナカイの採食が十分できなくなると、キャンプの移動を繰り返して自然とのバランスを保とうとする。これが、環境に対して保全的か破壊的かを判断することは難しい¹¹⁾。

4) トナカイの管理技術

トナカイには、牽引用のためにチュクチが自分の所有物と意識したものもあるが、ソフホーズ事務所ではすべてを国有と認知している。

トナカイの放牧では、午前8時から午後8時までとそれ以外とにわけて、約12時間ごとに牧夫が交代することになっている（表1）。このため、10月28日にトーノーが、トナカイキャンプを午後6時50分に出発して午前8時40分に帰ってきている。牧夫は、銃、投げ縄、双眼鏡、ナイフ、ランプ、お茶を沸かせるコンロなどをもって出かける。なお、冬にはトナカイがおとなしいので使わないが、夏にはブーメランのようなトナカイを追い払うもの“ウッスキトレン”を用いるという。

トナカイは、夏には灌木の葉やキノコ、冬には雪を掘り起こして地衣類を採食する。トナカイは、ツンドラで分散して採食するが、腰をおろして休息することもある。牧夫はトナカイの動きにあわせて、時にはトナカイをキャンプに誘導する。トナカイにとっての一番の外敵は、オオカミである。オオカミがトナカイの群れに近づくと、牧夫が銃で警告を与える。

NO.2では、3つのテントに分れて住む6人の牧夫が、冬のあいだは1人ずつのまわり当番となっている（表1）。例えば、10月28日昼と29日夜がワーシャ、30日夜と31日夜がワレーラというように2日連続して従事しているように、その順番に規則性があるわけで

表1 トナカイ放牧の当番名

	昼	夜	
1998. 10. 27	アローシャ	トレーセイウエ	2頭屠殺
10. 28	ワーシャ	トーノー	
10. 29	アローシャ	ワーシャ	
10. 30	トレーセイウエ	ワレーラ	キャンプの移動
10. 31	なし	ワレーラ	4頭屠殺
11. 1	アンドレー	トーノー	

ブリガーダNO.2のトナカイキャンプでの観察による。



写真4 約2,500頭のトナカイを放牧する牧夫。オムロイカイ川沿いの放牧地にて。

はない。このメンバーに入っているブリガーダ長Cは、90日間にわたる2年分の有給休暇の際中であつたので、見張りには参加していない。また、年長者Aは、トナカイを捕獲することはあるが、この見張りの仕事はしていない。

冬は、トナカイ群がおとなしいので、1人の牧夫が従事する(写真4)。また、夏のトナカイの放牧には犬を使用するが、冬の放牧には犬を使わない。NO.2には、2,568頭のトナカイがいる(表2)。牧夫たちは、これらトナカイの数を知らず、ブリガーダ長のCが種オスの数などをすべて知っている。これは、彼が定期的に数えて、ソフホーズ事務所

表2 1997年10月におけるブリガーダ別のトナカイ群の構成

ブリガーダのNo. トナカイの種類	1	2	3	5	8	9	10
出産可能なメス	454	1,008	479	965	235	1,483	393
1歳半のメス	148	247	100	61	18	328	89
6ヵ月の子	341	704	315	507	19	1,013	250
1歳半のオス	132	319	117	79	12	360	116
2歳半のオス	1	53	57	73	6	49	19
種オス	55	78	60	95	35	302	1
去勢オス	321	159	353	436	45	662	6
合 計	1,452	2,568	1,481	2,216	370	4,197	874

ソフホーズの統計資料より作成。例えばブリガーダNO.2では、1997年10月25日に、ソフホーズの役人とブリガーダ長のイワン氏によって、トナカイの種類別頭数が数えられた。



写真5 首に鈴をつけたトナカイ

に連絡しているからである。牧夫が国家に管理されているのがよくわかる。

放牧の際に、先頭を歩くトナカイは特に決まっていな。トナカイは、冬の間はトナカイゴケを求めて動いていく。トナカイは、すべての草がなくなるまで採食せずに、適当に採食したら移動する。しかし、草が少なくなると、トナカイがあちらこちらと動いて落ち着かなくなるとい。また、人が唇をプブとならしてトナカイにパンを与えると、トナカイは近づいてくる。つまり、一部のトナカイは人づけされている。

数頭のトナカイの首には鈴がついている（写真5）。これは、トナカイの存在を知らせる役割を持つ。牧夫のかけ声である“ヘイ、ヘイ”は右へ行け、“ハア、ハア”は左へ行けを示す。トナカイの後ろに回り込めば、まっすぐ進む。また、牧夫によって音色は異なるが、口笛を吹くと拡散していたトナカイ群がいっせいに凝集する。さらに、去勢は5月初めか8月末から9月初めまでにおこなわれ、NO.2には159頭の去勢オスがいる（表4）。

トナカイは、牧夫に誘導されることがなければ、平素はキャンプに戻ってくることはない。キャンプから離れた所で、放牧されている。放牧中にトナカイ同士が角をからませてけんかした際や、屠殺のために牧夫がトナカイを捕獲する際には、投げ縄が欠かせない。3人の男性がおのおの投げ縄を持って、お互い並んでトナカイの群に近づく（写真6）。どのトナカイにしぼるのかは、3人が小声で話をする。人が走り出して、縄を上であげてトナカイに近づく。トナカイは走る。人は角を狙って投げる。うまく角にかかると、トナカイとの綱引きが始まる。結局、人がトナカイの方に近づき、トナカイを捕獲する。

10月31日には、4頭のトナカイが解体された（写真7）。その内訳は、10歳のオス、5歳のメス、2歳のオス、3～4歳のメスである。このうち2頭分の肉は、キャンプで自家

消費されて、残りは村に運ばれた。

以上のように、牧夫は夏と冬のトナカイの生態の違いに応じて、犬や道具の使用の有無を変え、またトナカイ群のなかのものに鈴をつけたり去勢したりすることをおして、2,000頭以上が集まるトナカイ群を管理する技術を持っている。



写真6 トナカイを捕獲するために投げ縄をつかう牧夫。彼は、元ブリガーダ長である。



写真7 ブリガーダNO.2にてトナカイを屠殺するチュクチの女性。

4. 農場経営からみたトナカイ牧畜

対象とするソフホーズでは、経済的付加価値の高いものが注目され、トナカイ牧畜だけではなく、ペベックへの魚の販売によっても収益を得ている。村内では、10人近くが魚を獲り販売している。例えば村に住むローマは、3 t のサケをソフホーズに販売し、月当たり2,000,000ルーブル（約40,000円）を得ている。彼以外は、すべてロシア人であった。

1) トナカイ頭数の変化と経営戦略

国家公務員としてのチュクチの特性をいかして農場経営を維持するためには、収益の増大につながるトナカイの頭数の増加が不可欠になっている。

すでに前章で述べたように、すべての牧夫がトナカイ群の構成を知るわけではない。ソフホーズが、経営の維持と向上のために農場内のすべてのトナカイの頭数や性別を掌握している。3月末から4月初め、5月、10月、12月の年4回にわたり、統計担当者が村からツンドラを訪れ、各ブリガーダ別のトナカイ頭数を数えている。これらのデータをもとに、その年の各ブリガーダ別の屠殺頭数が割り当てられている。また、ブリガーダ長が毎月頭数を数えてソフホーズ事務所に伝えている。これにより、住民による屠殺頭数を把握することで、その代金が賃金から引かれることになる。例えば、食料用として1頭のトナカイを殺すと1,500,000ルーブル（約30,000円）引かれる。

レトクーチ村が所属するソフホーズにおけるトナカイ頭数は、10,000頭から30,000頭のあいだを示し、年変動が大きい（図7）。1980年には約27,000頭であったのが、1985年には約12,000頭に激減している。その後、わずか5年後の1990年には約25,000頭に回復し、

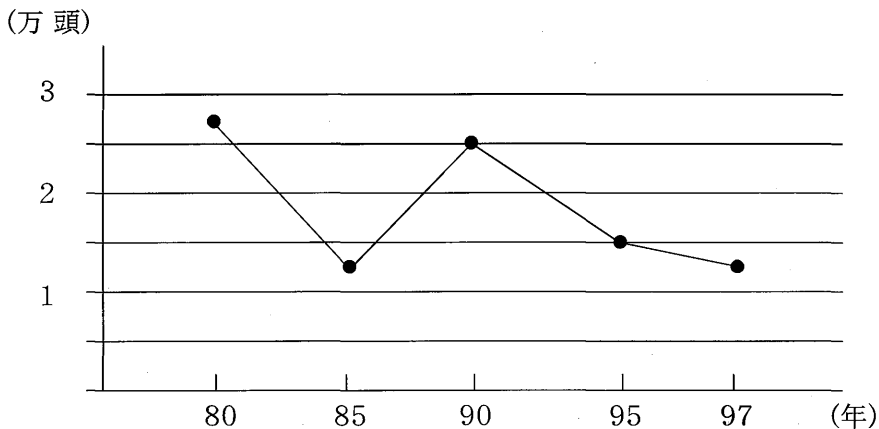


図7 レトクーチ国営農場のトナカイ頭数の年変動
ソフホーズの統計資料より作成

その後減少の方向を歩んでいる。このなかの減少は、次章で述べるように、家畜トナカイの群に野生トナカイが合流する事によって家畜トナカイが野生化したり、冬の雨で雪が解けて氷が張り、トナカイが草を食べられなくなって死亡したり、オオカミの被害による。また、増加はトナカイの自然繁殖による。

表4は、ブリガーダ別のトナカイ群の構成を示す。No.9の頭数が4,199頭で、このなかで最大数のトナカイを所有している。例えば、NO.2では、1,008頭の出産可能なメスがいて、6ヶ月の子で示されるように704頭のトナカイが生まれている(表2)。つまり、約2,599頭の群で、毎年約700頭の増加があるので、トナカイ群には35%の自然増加分があるとみてとれる。また、この群には、1歳半のオスが319頭、2歳半のオスが53頭、種オスが78頭、去勢オスが159頭含まれている。しかし、屠殺以外で出産可能なメスが148頭、6ヶ月の子が182頭、去勢オス17頭が死亡している。

このような各ブリガーダ別のトナカイの状況調査の結果にもとづいて、ソフホーズ長は毎年のトナカイの屠殺頭数を決めることになっている。1996年は1,200頭、1997年は約1,100頭である。1997年の内訳は、NO.9が500頭、NO.1が103頭、NO.2が200頭、NO.3が202頭、NO.5が100頭となっている。NO.8とNO.10は、0である。

村でのトナカイの屠殺は、キャンプで実施されるものとは大きく異なる。屠殺されたトナカイの保存を考慮して、11月15日～20日頃の寒い日に、村の近辺で、12ボルトの電気ショックを使ってトナカイが次々に殺される。

ソフホーズに集められた肉は、村人の食糧や学校・寄宿舎で消費される分とペベックのソフホーズ事務所に渡されるものとに分けられる。村での肉の価格は、トナカイ生産に関わる人は1kg当たり15,000ルーブル(約300円)、その他の人は30,000ルーブル(約600円)で販売される。トナカイ1頭は50～70kgの肉を持つので、1頭あたり1,500,000ルーブル(約30,000円)から2,100,000ルーブル(約42,000円)で取引されることになる。なお、2～3年前には袋角を販売したが、現在ではやっていない。皮の一部をチュクチがもらい、残りは捨てられる。

以上のように、トナカイ群の構成やその頭数の変化に応じて、ソフホーズでは毎年何頭のトナカイを殺すことがよいのかという経営戦略をたてていることがわかる。

2) トナカイ牧畜の国家管理と牧夫の給料

この村には、南北に約240km、東西に約200kmの農場が広がっているが、トナカイ牧畜は農場内で実施されてきた。

村人と各トナカイキャンプの人々とのあいだは、毎日無線で結ばれている。1988年には、10時30分、13時、19時30分の3回にわたった[NHK取材班他 1989: 30]。1997年11月には、10時30分、14時、19時の3回ではあるが、天候により無線が通じない日も多かった(写真8)。なかでも、NO.2のキャンプでは、1997年10月下旬の筆者の滞在時には、



写真8 村のソフホーズ事務所にて、ツンドラで生活する姉に無線連絡をするチュクチの女性。

無線機のマイクロホンがこわれていたので、まったく外部から連絡ができない状態であった。これらから、屠殺したトナカイの金額や雑貨屋での前借り金が差し引かれ、トナカイを失ったときには罰金が支払われる。また、1ヵ月当たりの集合住宅の家賃も、600,000ルーブル（約12,000円）、年金生活者と3人以上の子供がいる場合は300,000ルーブル（約6,000円）が差し引かれる。

夏のトナカイ放牧は、円錐型ハットの建てられるキャンプ地から離れてトナカイとともに移動する。その際に、ソフホーズ所有の万能走行車がついていき、彼らの食料やテントが運ばれる。また医者が各々のブリガーダをヘリコプターでまわって、結核を診断するサービスが1996年9月12日にあったが、1997年にはまったく実施されていない。

ソフホーズの会計係が、日曜日を休日とみなして月当たり27日間の労働として、きめ細かく給料の金額を計算している（写真9）。例えば、同じブリガーダ長であっても、最も多くのトナカイを放牧するNO.9の長は3,100,000ルーブル（約62,000円）とツンドラ在住者のなかで給与は高く、NO.2の長は2,500,000ルーブル（約50,000円）と安くなっている。トナカイの見張りである若者は、1,500,000ルーブル（約30,000円）である。リュウダは、料理代として780,000ルーブル（約15,000円）を得る。Aは、給与が540,000ルーブル、地区手当が540,000ルーブル、北方手当が540,000ルーブルで合計1,620,000ルーブル（約32,000円）となる。このように、トナカイの頭数などによって金額にばらつきが見られる。

以上のように、牧夫は村人との無線連絡ができ、毎年屠殺されるトナカイ数が決められ、給与が支払われている。



写真9 村のソフホーズ事務所にて、牧夫の給与を計算するロシア人の女性。机の上のノートには、個人別の給与の金額、トナカイ肉を利用したことで差し引かれる金額が記されている。

5. 放牧テリトリーの変化とチュクチの主体的対応

(1) 放牧地の再編(1968-1997年)とその要因

放牧テリトリーは、各ブリガーダ別の放牧地が社会慣行として決まっている状態と定義される。まず、1957年にソフホーズがつくられた時点でブリガーダが生まれ、ソフホーズによって各ブリガーダ別の放牧地が線引きされたと推察される。しかし、その範囲を確定できる資料は残っていない。

図8は、1968年の農場内の放牧テリトリーを示す。農場内の各々のブリガーダは、ソフホーズ事務所によって、12に区割りされていた。その多くが村に向けての細長い長方形であるのは、トナカイの屠殺の時に村の近くまでトナカイを放牧できるように配慮されているためと考えられる。また、NO.2、NO.3、NO.4、NO.5の放牧地の一部は、農場の領域を越えているのがわかる。さらに、当時NO.1に4カ所、NO.2に3カ所、NO.3に2カ所、NO.4に3カ所、NO.5に2カ所、NO.6に4カ所、NO.7に5カ所、NO.8に4カ所、NO.9に4カ所、NO.10に5カ所、NO.11に3カ所、NO.12に3カ所の合計で42カ所の狩小屋がつくられていた。

その一方で、図9は、1997年における放牧テリトリーを示す。この時点では、各ブリガーダの放牧地は、長方形のように規則的な形をしていない。これは、1968年のそれとは異なり、ソフホーズが上から区割りしたものではなく、現場の牧夫が自ら創造した領域であることを示している。このなかでは、NO.5、NO.9の放牧地が、完全に農場の範囲を

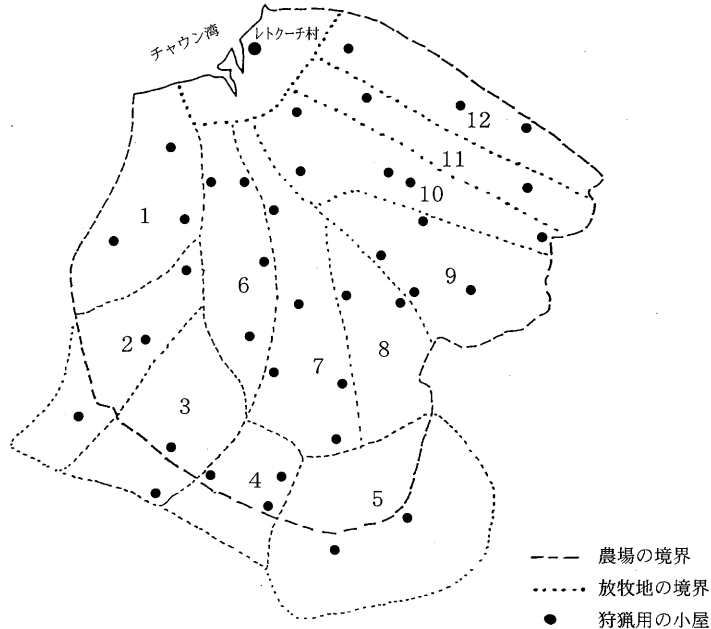


図8 1968年におけるレトクーチ国営農場内のブリガーダの区分

レトクーチ村の村役場におかれていたブリガーダ区分図を筆者が写したもの。
なお、ブリガーダ1、8、11の狩小屋の位置は、1、2、1ヵ所づつ不明である。

越えて隣の農場の領域を占有している点が注目される。NO.2が、レトー川、オムロイカイ川、プチェエル川の流域を占有することは、前章で述べている。NO.5は、2m以上の樹高のある木が自生しているので、レスノイ（森があることを意味する）とも呼ばれる。さらに、NO.4（図9中にはない）とNO.6とNO.7が、近年になって消失している点も注目される。なお、この時点では、獲物が枯渇したためか狩小屋がみられない。

以上のように、2つの年代の放牧テリトリーを比較すると、各々のブリガーダの放牧地の変化を指摘できる。これらの変化は、次のような理由によっている。まず、1969年から1971-72年の落雷によるツンドラでの火災によってトナカイの餌となるトナカイゴケがなくなった。その結果、ブリガーダの放牧地は、各ブリガーダの自主性にゆだねられ、NO.5、NO.7、NO.9は、隣接する農場の領域内を占有するようになっている。例えば、NO.9はアナディル川の上流部のウズベク地区やシュミット地区の一部を、NO.5、7はコリマ川の支流の上流部を占有している（図9）。

NO.7の移動に関しては、別の理由も挙げられている。NO.7は、現在のNO.2のあたりを占拠していたが、現在のNO.5の近くに移っていった。これは、その冬に、雨で雪が解けて氷が張り、草を食べられなくなって、多くのトナカイが死亡したことによる（1930年生、67歳、レクリン ボリス談）。その後、1995年頃にNO.7は年長者の死亡による牧

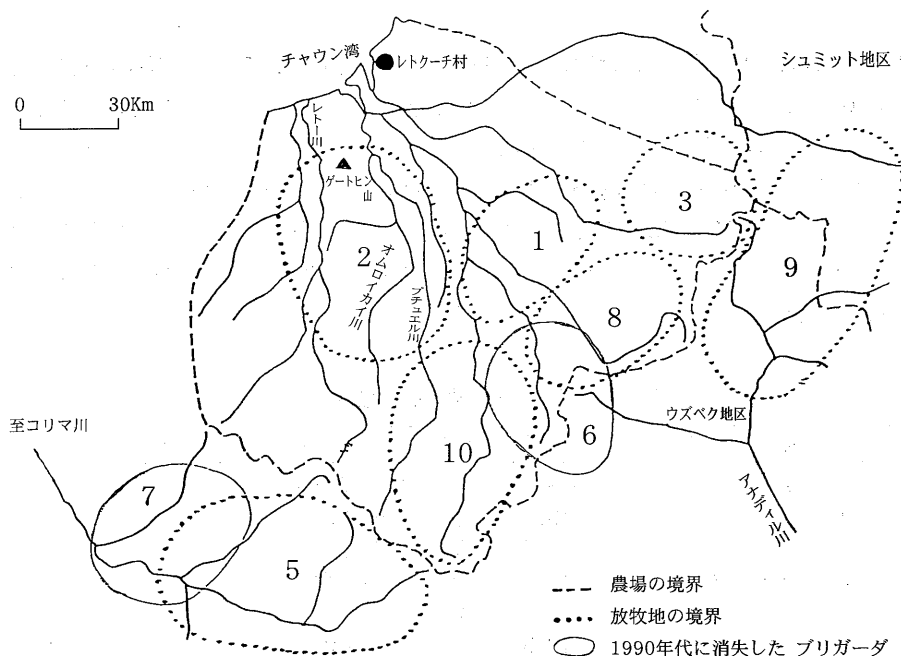


図9 1997年における各ブリガーダの放牧地
聞きとり調査による

夫の数の減少やトナカイ数の減少にともなって、NO.5のなかに含まれることになる。

次に、1994年にはNO.4が消失する。これは、同年の12月28日の昼ごろに、群よりも数の多い野生トナカイがやってきて、NO.4のすべてのトナカイが逃げってしまったことによる。その時には、群はキャンプから5～6 km離れた所にいて、現在、NO.2にいるトーノーが1人で監視していた。しかし、彼が食事のためにキャンプに戻っている間に、1,200頭のトナカイが1頭もいなくなった。この結果、1995年に、NO.4の2家族がNO.2へ移籍した。これには、トーノーが含まれている。彼は、NO.4とNO.2の地形などが似ていることから、NO.2のブリガーダ長のCに移籍を望んでいることを伝えて、それが実現したものである。なお、NO.6の消失の時期は1992年以前というが、その原因は明らかではない。

以上のことから、1968年から1997年にかけて、各ブリガーダ別の放牧地が大きく変化してきたこと、その要因としてソンドラでの火災や野生トナカイによる家畜トナカイの逃亡などが挙げられることが明らかになった。

(2) ブリガーダ構成員の増加ーブリガーダNO.9の事例ー

近年のトナカイ牧畜をめぐる新しい現象として、ブリガーダの構成員数の増加を取り上

げる。

1988年4月には、4家族で12人が4,000頭のトナカイを飼養していた [NHK取材班他 1989: 18]。具体的には、ブリガーダ長ブブカイとその妻、ノーチンとその妻、コリヤークの人、そしてグルゴートセイフンの4家族である。

その後、1997年11月現在、約10家族で29人が4,199頭のトナカイを飼養している（表3参照）。この中には、1988年に滞在していた人がすべて含まれ、コリヤークが2名、エヴェンが1名いる。これから、約10年間にトナカイ頭数は変化していないが、ブリガーダの構成員数が大幅に増加したことがわかる。

表3 ブリガーダNO.9の成員

	名 前	出生年	性別	備 考
1	ブブカイ	1939	男	ブリガーダ長
2	アローシャ	1975	男	1の子供
3	?	1976	女	2の妻
4	ビターリック	1979	男	1の子供
5		1940	女	
6	アレック	1973	男	5の子供
7		1976	女	6の妻
8		?	女	6の子供
9		?	女	6の子供
10	アルトール	1975	男	5の子供
11	グルゴートセイフン	?	女	
12		1960	男	11の子供
13		1937		コリヤーク
14	ノーチンユーラ	1943	男	コリヤーク
15		1947	女	14の妻
16		1971	男	14の子供
17		1976	女	
18		1995	?	17の子供（双子）、父は不明
19		1995	?	17の子供（双子）、父は不明
20		1977	女	
21		?	女	20の子供、父は不明
22		1975	男	
23		1971	男	妹は、ウズベクへ嫁に行く
24		?	女	23の妻、ウズベクから
25		1952	男	シュミットから
26		1952	女	ウズベクから
27		1963	男	シュミットから、独身。
28		1974	女	シュミットから、父親は15の兄弟
29		1969	男	1988年にはブリガーダNo.1にいた

出生年は、ソフホーズ事務所の資料による。
 その他は聞き取り調査による。

これは、前節で述べたように、近年になって、農場の境界を越えて放牧地を展開した結果、放牧中に隣接の放牧集団と出会うことも多くなり、その間でのチュクチ同志の通婚がおこなわれた結果である。例えば、地区は異なるが近隣の農場であるシュミットから移住者が3名（表5中の25、27、28）、ウズベクから移住者が2名（表5中の24、26）いる。例えば、1993年冬に、ブブカイの知人がシュミット地区から移り住んできた。その一方で、この集団からシュミットへ養子に行った人もいる。また、集団内での若者同志の婚姻や未婚の母が生まれた結果、数名の乳飲み子がいる。

以上のような農場を越えての婚姻は、火災による植生変化などにより農場の境界を完全に越えてまで放牧地を変えてきたことが一つの原因となって、トナカイ牧畜の維持のためにチュクチが主体的につくりだした戦略とみなすことができる。この点では、チュクチの牧畜は旧ソ連の崩壊による影響を受けていないのである。

6. ソ連崩壊後のトナカイ牧畜の3つの適応型とその違いの要因

この報告では、中心村落（村）、トナカイキャンプ、農場経営の3つの視点から、ツンドラの自然とトナカイ牧畜とのかかわりあいを明らかにすることを目的とした。その結果、以下の4点が明らかになった。

(1) 中心村落には、日本の公務員住宅と変わりのない施設や集合住宅が整っており、ツンドラでのトナカイ牧畜に従事する人も村内に部屋を借りている。ここではチュクチが全人口の65%を占め、ロシア人らと混住している。就業状況では、ソフホーズや村役場の多くの仕事はロシア人らが占め、多くのチュクチはトナカイ牧畜に関与するという違いが明瞭であった。

(2) トナカイキャンプは、親族関係を中心に構成されている。また、他のキャンプからの移籍者があることから、集団としては離合集散の性質を持つ。年齢構成は、中心村落の学校に通っているために10代の若者は皆無であるが、20代、30代の青年はみられる。

キャンプの移動形態は、夏とそりの使用できる冬では異なる。夏では、トナカイを放牧するキャンプとトナカイ皮を加工するキャンプに分かれて、前者は万能走行車とともに移動を繰り返すが、後者はまったく移動しない。冬は、スノーモービルかトナカイぞりを使って、すべての成員が1～2週間に1度の割合で移動する。移動ルートはほぼ決まっていて、夏は川の中・上流で、冬は海岸の近くに向かう。

トナカイの管理では、一日中牧夫がつきっきりである。牧夫は、1日に2人が交代で従事する。放牧には夏には犬を使うが、冬は使わない。牧夫はオオカミよけのために銃を持ち、トナカイ群の誘導には口笛やかけ声が使われる。

(3) 農場経営では、ソフホーズ事務所がトナカイ群の構成や頭数を調べることを通して、トナカイ牧畜の動向を管理している。牧夫は村人との無線連絡ができ、毎年屠殺されるト

ナカイ頭数が決められ、給与が支払われている。このため、儀礼に使用されるトナカイや自家食糧とするトナカイの代金は、給与から差し引かれるシステムになっている。

(4) 放牧テリトリーの変化やキャンプの構成員の増加のなかに、チュクチの主体的対応がみられた。また、放牧地の変化の要因としては、ツンドラでの火災や野生トナカイの存在が挙げられ、近隣の農場の領域への放牧地の変化にともない近隣のチュクチとの婚姻が生まれていることが明らかになった。

以上の事例から、チュクチのトナカイ牧畜は、旧ソ連の崩壊後もソフホーズが維持されており、生産遊牧であると同時にかつての遊牧形態をも反映している。筆者は、これを第1のタイプとして「牧畜型」と呼ぶ。このタイプには、コリヤークが含まれる。

例えば、コリヤーク自治管区ペンジナ地区のスラウトノイエを調査した大島は、1996年の人口670名のうちコリヤークは362名で、トナカイ遊牧を生業にしているという。それぞれ男性の牧夫6名と女性2～3名からなる5つのブリガーダがあり、男性1名につき50頭までのトナカイ所有が許されている [大島1998: 123]。ここでは、ブリガーダが維持されている点ではチュクチと同様であるが、個人所有のトナカイがみられる点で異なっている。

第2のタイプは、生産遊牧を中心とする「飼育型」を示す。これには、ウイルタとエヴェンが含まれる。ウイルタでは、現在のソフホーズでは、15名の男性の牧夫により、女性も村住みである [KWON 1993]。エヴェンでは、655人のうち101人が牧夫である。82人の男性のうち未婚は37人である。女性は19人いる。朝5時から夜9時すぎまで牧夫は働く。中心村落から80～320km離れた所に、6～7人の牧夫が放牧隊をつくる放牧キャンプが点在する。そこには、農場に雇用された2人の女性の料理人がつく [VITEBSKY 1989]。また、これらは青年男子を中心とする牧夫による職業的な牧畜と呼ばれているが、個人的所有トナカイの耳印を共有する集団を潜在的に形成したり、搾乳メスを個人的所有トナカイのなかに生産させることで効果的に家畜を増やしていたことが指摘されている [高倉 1998: 37-38]。そして、1993年にソフホーズ・システムが解体している。

第3のタイプは、ブリガーダは健在であるが、個人所有トナカイの占める割合の多い「遊牧型」を示す。ネネツでは、個人所有のトナカイが全トナカイの半数を占め、ソフホーズの牧地とは別に私有トナカイの放牧地があるという。そして、トナカイ飼養の委託もみられる [吉田 1998]。また、ヤマル半島に暮らすネネツでは、12～50人余りの規模の遊牧集団であるブリガーダが50もある [MONTAIGNE 1998: 160]。

以上の3つのタイプを比較することから、現代のチュクチの牧畜は、ウイルタやエヴェンのそれと比べて次のような特徴が見いだせる。第一に、チュクチは、半定住生活の歴史がウイルタやエヴェンより浅いことから、また、ツンドラに適応したトナカイの多頭飼育者であったことから、現代のチュクチには、「伝統的」なツンドラの牧畜形態が色濃く残っていた。つまり、ゆるやかにソフホーズ化していったために、家族群としてのキャンプが根強く残っている。そして、村とキャンプとの組み合わせによって現代的な適応をしてい

る。第2に、このことは、ウイルタやエヴェンのような生産遊牧ではなく、国家に管理されてはいるがチュクチの自主的対応を持つ牧畜形態である。これは、放牧テリトリーの再編や近隣の農場に属する人との婚姻や移籍のなかにあらわれていた。次に、チュクチとコリヤークやネネツを比較すると、トナカイの私有化のすすんでいるネネツやコリヤーク、牽引用のトナカイを除いて国有化が根強く続くチュクチとの違いを見いだせる。

これらの違いを生み出した要因は、ソフホーズ化する前のトナカイ飼養のあり方が関与していると考えている。もともとトナカイ飼養頭数が少なく、トナカイ飼養が生業の中心ではなかったツングース系のウイルタやエヴェンでは、国家の多頭化政策のもとで「飼育型」にならざるえなかった。しかし、もともとトナカイ飼養が生業の中心であったネネツやチュクチでは、かつてのトナカイの世帯別所有頭数に格差があったとはいえ、家族形態を維持しながらソフホーズ化に対応できたものであると考えられる。

チュクチは、旧ソ連の崩壊においても、ソフホーズのもとでのトナカイ牧畜を維持してきた。彼らの牧畜は、屠殺頭数などで国家に管理されていると同時に、放牧テリトリーの再編や近隣のチュクチの集団との婚姻などを通して、主体的対応をしてきたと結論づけられる。現在、NO.9を中心としたブリガーダの人々は、会社組織への移行を主張しているが、村のソフホーズ事務所から強い反対を受けている。村内のロシア人の人口がますます減少しているなかで、チュクチ自らの手によるトナカイ牧畜を成立させることができるのか否か、今後の動向が注目される。

謝辞

本稿の現地調査は、平成9年度文部省国際学術研究『北太平洋における先住民社会と交易に関する民族学的研究』（課題番号09041042、代表：大塚和義教授）に基づいている。また、国立民族学博物館の共同研究会（『東北アジア諸民族の文化変容に関する研究』代表：煎本孝教授）での発表では、多くの方々にご教示を受けた。さらに、現地の調査においては、文化庁のオースキン氏、レトクーチ村のソフホーズ長のシーズンホフ氏、村長のアントヌフン氏、ゲウトアさん、ローマ氏、トナカイキャンプのアントヌフン氏、リュエダさんなど多くの方々にお世話になった。最後に、自らのチュクチ語の調査をしながら通訳してくれた呉人徳司氏の助けがなければ、この調査はできなかった。以上の方々に、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 筆者は、“牧畜民と国家とのかかわりあい”というテーマのもとで、アフリカにおけるソマリのラクダ牧畜やフルベのウシ牧畜との比較を念頭におきトナカイ牧畜という言葉を使用する。しかし、エヴェンではトナカイ飼育〔高倉 1998〕、ネネツでは遊牧〔吉田 1998〕が使われている。これらは、シベリアの3つの地域での牧畜形態の違いや研究者による問題意識の違いが、用語の違いにあらわれていると思われる。

- 2) 本稿で対象とするレトクーチ村に関しては、ブリガーダNO.9の生活についての2つの報告がある。両者とも約1週間の現地調査という共通性はあるが、1988年4月のソフホーズ内の遊牧民支配の管理システム [NHK取材班 1989] や1991年2月のトナカイと人との関係 [大島 1993] が明らかにされている。また、1991年のチュクチの民族音楽の調査 [谷本 1992] やチュクチの民話やチュクチ語の調査 [呉人 1997, 1998] が報告されている。
- 3) ヤノラナイでは、1992年に5つのトナカイ群がいたが、1995年には2つの群れに減少している [呉人、私信]。そして、1997年10月現在、2家族と2人の青年が飼育する2,600頭のトナカイ群のみになっている。その結果、ヤノラナイは役場もなくなり、ペベック市に統合された。また、アイオンには、3つのブリガーダがあり、3つのトナカイ群がある。なお、1995年11月に、村内にあるロシア科学アカデミー鳥類研究所の建物は、ペベックにある暖房関係の会社に売却された。
- 4) ソフホーズで所有する万能走行車 (ヴェズジェホート) は、故障中が多く作動できるのは1台のみである。また、ソフホーズでは、村内で数頭の牛やブタを飼っている。1頭の生乳は、15,000ルーブル (約300円) で販売されている。
- 5) ロシア人のレーナさんは村に11年住むが、1998年4月に子供とともに村から出る予定であるという。夫は村の発電所に勤めていたが、それをやめて中国との国境の近くで、軍の船の作業員として仕事についている。
- 6) 村の郵便局で働いているチュクチの女性が、1997年7月1日から約1ヵ月間、有給休暇をとり、モスクワやサンクトペテルスブルクに観光に行っている。これには、交通費や滞在費を含めて15,000,000ルーブル (約300,000円) が支払われている。ちなみに、彼女の月当たりの給与は、500,000ルーブル (約10,000円) である。
- 7) 村の文化庁で2年間働く男性の給与は、1,000,000ルーブル (約20,000円) である。
- 8) 1988年において、寄宿学校では生徒の半分がチュクチの子供であった [NHK取材班他 1989: 16]。
- 9) 1924年に、極北諸民族に対する援助の中央機関として、全露中央執行委員会に付属する北部辺境諸民族援助委員会 (略して、北方委員会) が設置された。そこでは、ボゴラスやシュテルンベルクが指導的な役割をはたしたといわれる。文化基地は、北方委員会がシベリアのもっとも僻遠の地に僻地住民への経済的、文化的サービスの施設として、1927年から1935年にかけて組織したものである [飯田 1989: 163]。また、1988年3月におけるペベックの人口は15,000人を示し、チュクチは1%ほどであるという [NHK取材班他 1989: 10]。
- 10) 地衣類を飼料とするトナカイの移牧が冬は南方の森林ツンドラまで南下するが、夏はユーラシア大陸の北縁の海岸部にまで達する [牧田 1968: 215]。例えば、ヤマル半島に暮らすネネツは、毎年春になると、冬を越した針葉樹林帯北部の森をあとにして、

320km先のヤマル半島のツンドラ地帯へ移動する。そこでは、トナカイが出産をして、夏の放牧地となる [MONTAIGNE 1998: 160]。しかし、本稿の調査地では、夏と冬の移動の方向が逆である。

- 11) 1930年代のチャウンチュクチは、1年間に1家族当たり50頭のトナカイを屠殺していたといわれる [KRUPNIC 1989: 109]。筆者は、このチャウンチュクチが、本稿の対象集団の一部に対応していると推定している。
- 12) 今回は予備調査であり、トナカイが採食する地衣類の同定（冬はハナゴケに限定される）や採食物の季節変化（夏はキノコや木の葉など多種類あり）、人が薪として利用した後の植生の変化に関しては、次回の調査課題としたい。

文 献

BOGORAZ, V. G.

- 1901 The Chukuchi of north-eastern Asia. *American Anthropologist* 3: 80-108.

池谷和信

- 1993 「シベリア牧畜民研究」『北方学会報』2: 12-13.

- 1998a 「日本におけるモンゴル牧畜民に関する研究」『北方学会報』5: 9-11.

- 1998b 「現代のチュクチにおけるトナカイ牧畜の生態」煎本孝編『周極地域諸文化の比較研究一言語・生態・世界観一』北海道大学文学部 49-57.

飯田規和

- 1989 「極北の少数民族」NHK取材班他『北極圏』3 東京：日本放送出版協会，161-165.

井上絃一

- 1996 「トナカイ飼育は生きのびるか」『ロシア極東への視座』北海道大学スラブ研究センター 27-44.

呉人徳司

- 1997 「チュクチ語テキスト(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6: 31-67.

- 1998 「チュクチ語テキスト(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7: 1-30.

KRUPNIK, I.

- 1989 *Arkticheskaia Ethnoekologiya*, Moscow: Nauka Publishing House. (*Arctic Adaptations* 1993 translated by Marcia Levenson)

- 1998 Understanding reindeer pastoralism in modern Siberia: Ecological continuity versus state engineering. Ginat, J. and Khazanov A. (eds), *Changing Nomads in a Changing World*, Brighton: Sussex Academic Press, pp. 223-242.

KWON, H.

- 1993 *Maps and actions: Nomadic and sedentary space in a Siberian reindeer farm*. Ph. D. paper Department of social anthropology, University of Cambridge.

牧田肇

- 1968 「生物地理」西村嘉助編『自然的基礎』東京：大明堂 pp.186-241.

MONTAIGNE, F.

- 1998 Nenets. *National Geographic* 193(3): 120-137.

NHK取材班他

- 1989 『北極圏』3 東京：日本放送出版協会.

大島稔

- 1993 「ツンドラに生きるチュクチの子供達」北方文化振興協会『アークティック・サークル』6: 12-14.
- 1998a 「コリヤークのトナカイ飼育ー1996年ペンジナ地区スラウトノイエにおける調査」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』文部省国際学術研究調査報告書 小樽商科大学言語センター 117-133.
- 1998b 「トナカイ遊牧民ーカムチャツカのもうひとつの顔ー」『季刊北方圏』105: 12-19.

高倉浩樹

- 1998 「脱社会主義化のトナカイ飼育業の再編ー東シベリア・北部ヤクーチアの一地域社会の変容過程ー」『民族学研究』63(1): 19-66.
- 1999 「レーニントナカイと個人トナカイの間で」『国立民族学博物館研究報告 別冊』20: 541-585.

谷本一之

- 1992 『北極圏、ツンドラと氷原を渡る響き』東京：同盟舎.

VAKHTIN, N.

- 1994 Native people of the Russian Far North. Minority Rights group (eds.), *Polar peoples*. London: Minority Rights publications, pp.29-80.

VITEDSKY, P.

- 1989a Perestroika among the reindeer herders. *Geographical Magazine* 61: 22-25.
- 1989b Reindeer heerders of northern Yakutia. *Polar Record* 25: 213-218.

吉田睦

- 1998 「西シベリア・ギダン・ネネツの食文化ー現代極北トナカイ飼養民の食の文化的・社会的解釈ー」『民族学研究』63(1): 44-66.